明治学院大学図書館付属
遠山一行記念
日本近代音楽館
Kazuyuki Toyama Memorial
Archives of Modern Japanese Music
館報（第4号）

目次

音楽館名称変更について
音楽館の近況
第三回レクチャーコンサート報告
遠山一行先生を偲ぶ
日本近代音楽館の資料検索について
どこまでが「音楽」？
「発車メロディ」の現在が問いかけるもの
資料受入報告
〈コラム 著作権あれこれ②〉
◇日誌から◇
編集後記

音楽館名称変更について

秋月望

明治学院が日本近代音楽財団と資料継承協定を締結したのは二〇〇九年。その後、約五〇万点に及ぶ日本の近現代音楽に関する資料が財団から寄贈され、大学図書館付属の日本近代音楽館として開館したのは二〇一一年五月のことでした。開館以来、国内外の多くの研究者や音楽愛好家の方々にご利用いただき、音楽専門資料館として新たな資料収集や所蔵資料の整理、データベースの構築などに努めています。この間、音楽展「五線譜に描いた夢―日本近代音楽の一五〇年」を開催して当館所蔵の音楽資料などを各方面の方々にご紹介する機会を得ました。またレクチャーコンサートには毎回学内外の多くの方々にご来場いただいています。先日は、図書館フロアーで音楽館の蓄音機を使ったコンサートを開き、学内の学生・教職員にＳＰレコードの音色を楽しんでもらいました。

こうした日本近代音楽館の活動の淵源が一九六二年に設立された遠山音楽財団の図書館にあることはご承知のとおりです。明治学院大学では、遠山一行先生の収集された資料だけでなく、その精神をも引き継ぎながら、音楽界のみならず社会全体に貢献できる音楽資料館として運営していく所存です。今回、日本近代音楽館に昨年逝去された遠山一行先生のお名前を冠して、その業績を永く後世に伝えて行くことに決定しました。一二月一〇日をもって遠山一行記念日本近代音楽館となります。

今後とも関係者の皆様のより一層のご協力とご支援を賜りながら音楽資料館としての役割を充実させていければと願っております。

（あきづき・のぞみ　日本近代音楽館長
本学国際学部教授）

音楽館の近況

●第四回レクチャーコンサート

一〇月一七日（土曜日）、本学アートホールにおいて第四回日本近代音楽館レクチャーコンサート「遠山一行先生とモーツァルト」が開催された。第一部はモーツァルト研究の第一人者として知られ、遠山一行氏と親交の深かった海老澤敏氏によるお話。第二部は、篠原悠那（vn）、北田千尋（vn）、西悠紀子（va）、日下部杏奈（vc）の各氏による演奏で、モーツァルト作品の中でも遠山氏が特に高く評価していた「ハイドン・セット」から、第一番、第六番が取り上げられた。（詳細次号）

●蓄音機によるＳＰレコードコンサート

七月一七日（金曜日）、本学白金校舎図書館七階音楽館前にて、昨年メンテナンスを完了した蓄音機、ビクトローラ・クレデンザによる館所蔵ＳＰレコードの学内公開試聴会を行った。曲目は以下のとおり。

・ベートーヴェン作曲「交響曲第５番ハ短調〈運命〉」第１楽章より
　トスカニーニ指揮ＮＢＣ交響楽団 Victor JD-1611 ＊大佛次郎ＳＰレコード・コレクション
・ベートーヴェン作曲「弦楽四重奏曲第９番ハ長調〈ラズモフスキー第３番〉」第１楽章より
　ブッシュ弦楽四重奏団　His Master’s Voice D.B.2109　＊武田久吉ＳＰレコード・コレクション
・ムソルグスキー作曲「アウエルバッハの酒場でのメフィストフェレスの歌（蚤の歌）」
　シャリアピン　ゴジンスキー　Victor RL-7　＊福原信夫文庫

●音楽館新ＯＰＡＣ

旧システム「ＬＳ１」からデータを移行、整備作業を進めてきた音楽館の新ＯＰＡＣ（オンライン蔵書目録）は、一二月一〇日、館内にて暫定版の公開を開始した。年度内にはＷｅｂ公開の予定である。公開される目録データは、前号告知の通り、書籍、楽譜、ＣＤなど出版物の一部で、当面は、カード目録の遡及入力を含め、出版物蔵書目録の充実をめざす。なお、新ＯＰＡＣの概要について、音楽資料の特殊性に鑑みて採用された「ＴｏｃｃａｔａＭＡＲＣエディターシステム」のシステムデザインを担当された鳥海恵司氏にご寄稿いただいている（四面）。

第三回レクチャーコンサート報告

皆川達夫氏と中世音楽合唱団

二〇一四年一一月八日（土曜日）、本学白金キャンパスアートーホールで、日本近代音楽館レクチャーコンサートシリーズⅢ「洋楽渡来考」が開催された。

今回のテーマは、一六世紀、キリスト教とともに渡来したものの、慶長の禁教令によって根絶やしにされてしまった「洋楽」について。中世ルネサンス音楽研究の第一人者で、ラジオ番組「音楽の泉」でも広く知られる立教大学名誉教授皆川達夫氏を講師に迎え、氏の主宰する中世音楽合唱団の演奏によって、四〇〇年の時を溯った。演奏曲目は左記の通り。

▽現存する唯一のラテン語聖歌楽譜資料、『サカラメンタ提要』より【図版1】

・「かかる尊い秘跡をば Tantum ergo Sacramentum」

・「来たれ創造主なる聖霊 Veni CreatorSpiritus」

▽ラテン語による祈祷文を変体仮名で記した『キリシタン・マリア典礼写本』（東京国立博物館蔵）より

・「めでたし海の星 Ave Maris Stella」

▽一五九一年三月三日（天正一九年閏一月八日）、前年帰国した天正少年遣欧使節が聚楽第で関白秀吉に謁見した際に演奏したと思われる曲

・ジョスカン・デプレ作曲「千々の悲しみ Mille regretz」

▽長崎県生月島の「かくれキリシタン」が今なお歌い継いでいる「オラショ」と聖歌

・歌オラショ（山田地区）「ぐるりよざ」一九七五録音CD演奏（出口左吉ほか）＊CDデータ別記

・十六世紀スペインの聖歌「オ・グロリオザ・ドミナ O gloriosa Domina（栄光の聖母よ）」【図版2】

▽箏曲「六段」に刻まれたラテン語聖歌の影響

・グレゴリオ聖歌「クレド第三番」と箏曲「六段」初段、二段の同時演奏CD演奏（野坂操壽、皆川達夫指揮中世音楽合唱団）＊CDデータ別記

▽同時期の多声音楽

・トマス・ルイス・デ・ヴィクトリア作曲「アヴェ・マリア Ave Maria」

・フランシスコ・ゲレーロ作曲「贖い主のおん母 Alma redemptoris mater」

【使用CD】

『洋楽事始』、『箏曲〈六段〉とグレゴリオ聖歌〈クレド〉』（詳細データ別記）

【当日展示資料】

・『サカラメンタ提要』雄松堂出版、二〇〇六（キリシタン版精選）＊原本上智大学キリシタン文庫

・東洋文庫監修『サクラメンタ提要長崎版』勉誠出版、二〇一四（東洋文庫善本叢書四）＊原本東洋文庫

・天理図書館編『おらしょの翻訳』天理大学出版部、一九七六（天理図書館蔵きりしたん版集成四）

・皆川達夫氏関連著作より『オラショ紀行』『洋楽渡来考』『洋楽渡来考再論』、CD『洋楽渡来考』『箏曲〈六段〉とグレゴリオ聖歌〈クレド〉』（詳細データ別記）

●標題紙

●Tantum ergo Sacramentum (pp.393-394)

(参考)上図楽譜の現代譜

【図版1】Manuale ad Sacramenta (Nagasaqui,1605[慶長10])

【図版2】O gloriosa Domina (Incipit Ordo ad Processiones. 1553, Granada [Madrid, Biblic M.1208] fol.60v-61r)

【皆川達夫氏関連著作】

〈書籍〉

・『オラシヨ紀行』日本基督教団出版局　一九八一

・『洋楽渡来考キリシタン音楽の栄光と挫折』日本キリスト教団出版局、二〇〇四

＊本書の基礎をなす論文によって、二〇〇三年、明治学院大学より芸術学博士号が授与された。

・『洋楽渡来考再論筝とキリシタンとの出会い』日本キリスト教団出版局、二〇一四

DVD付

〈視聴覚資料〉

・LP『洋楽事始』東芝EMI、一九七六 Toshiba: TW-80002～80003

＊復刻CD山野楽器（企画・発売）、東芝EMI（制作）、一九九八　Yamano Music：YMCD-1060～1061

・CD&DVD『洋楽渡来考CD&DVD版』日本伝統文化振興相団、二〇〇六 VZCY-1～3, VZBY-1

・CD『筝曲〈六段〉とグレゴリオ聖歌〈クレド〉』日本伝統文化振興財団、二〇一一 VZCG-743

皆川達夫氏は、旧日本近代音楽館（日本近代音楽財団）の資料委員長務め、永く館の資料充実に力を注いでこられた。ご自身の資料については館内に記念文庫「皆川達夫文庫」が設置されている。

遠山一行先生を偲ぶ

樋口隆一

遠山一行先生が逝かれて一年になる。そう思っただけで、先生の温顔が目に浮かぶ。

先生の笑顔は、日本の音楽界全体に向けられて、数々の難事業を可能としてこられた。その中心は、毎日新聞を中心とした評論活動と、遠山音楽図書館、日本近代音楽館を中心とした日本近代音楽資料の収集であることは間違いないが、草津夏期国際音楽祭音楽監督、芸術総合雑誌『季刊藝術』の創刊、東京文化会館や東京芸術劇場の館長、桐朋学園大学学長といった、いわば社会と音楽を結ぶ事業の発展に尽くされた功績も忘れてはならない。

私は、慶應義塾大学文学部で中野博司（博詞）先生と皆川達夫先生のご指導を受け、音楽学の研究を志したが、当時の総合大学には音楽学の専門文献も少なく、しばしば広尾の聖心女子大学の向かいにあった遠山音楽財団附属図書室、さらには西麻布の遠山音楽図書館に通って勉強させていただいた。すると時々は館長の遠山先生が入ってこられることもあり、学生の私は大いに緊張したわけだが、遠山先生の優しい眼差しに救われ、また励まされたことを思い出す。それからＤＡＡＤの奨学金を得てドイツに留学し、博士論文を兼ねて『新バッハ全集』の校訂に携わることになるのだが、そこに至る基礎は、遠山音楽図書館で培ったと言っても過言ではない。ドイツの奨学金が四年で切れたときも、遠山先生が理事長をつとめられていた偕成会の奨学金を頂き、なんとか博士論文を完成させて帰国することができたのである。

当時の副館長は、皆川達夫先生と明治学院大学教授の平島正郎先生のお二人だった。平島先生は、明治学院大学に芸術学科を設立することを考えられ、一九八四年に私を非常勤講師として呼んで下さった。たまたまその年にはドイツの大指揮者ヘルムート・リリング先生が、白金校舎を会場に日本バッハ・アカデミーを主催され、私も通訳としてお手伝いすることとなった。思えばこれが二〇〇〇年に始まる明治学院バッハ・アカデミーのルーツとなった。

一九九〇年、明治学院大学には文学部芸術学科が設立されたが、遠山音楽図書館もすでに一九八七年には日本近代音楽館へと改組され、麻布台に本拠を構えてさらに大きな発展を遂げた。母体の日本近代音楽財団も、遠山先生が私財を投じて設立されたものだった。

二一世紀に入ると、遠山先生も八〇歳を超えられ、日本近代音楽館の発展的な継承を考えられ始められた。遠山先生と皆川先生から、その継承の担い手として明治学院大学をとのお話を頂いたのは、二〇〇八年頃だったと思う。

二〇一一年五月、明治学院大学図書館付属日本近代音楽館は無事に開館し、明治学院大学は遠山の先生の功績を称えて名誉博士号を授与させていただくことができた。ガウンを着て礼拝形式での授与式に臨まれた遠山先生の笑顔が忘れられない。このたび、日本近代音楽館は、「遠山一行記念」を冠した名称変更をすることとなった。先生のお名前がそのライフワークと共に永く語り継がれていくことを、喜んでいただけると思う次第である。

（ひぐち・りゅういち　館運営委員
明治学院大学名誉教授
国際音楽学会副会長）

明治学院と日本近代音楽財団の資料寄贈合意書調印式
（2009.7.24　若林之矩（右）、遠山一行両理事長）

日本近代音楽館の資料検索について

鳥海恵司

音楽館初となるインターネット上での目録検索（ＯＰＡＣ）は、音楽館の館内専用だった旧システムからのデータ移行とそれに伴う微調整作業を終え、公開に向けて作業が進められている。この記事では、近々公開される予定の検索システムの概要を紹介する。　最初に、検索対象について。現在、印刷楽譜、図書、録音資料の所蔵約一万七千件がこのシステムで検索できる。手稿楽譜を含むこれ以外の所蔵資料については今後のデータ化が期待される。

動作確認済みのインターネットの閲覧ソフト（ブラウザ）は、ＩＥ（Ｅｄｇｅ）、グーグル・クローム、サファリの三つ。これらが作動するＰＣ、タブレット、スマートフォンで利用できる。

資料検索（ＯＰＡＣ）の画面は、単純検索・詳細検索・一覧表示・詳細表示・タグ表示、の五つというシンプルなもので、やや古いタイプに属する平均的な画面構成を採用している。なお、日本近代音楽館は館外貸出を行わないので、貸出・返却への接続、予約機能などは備わっていない。

資料検索のトップ画面は単純検索で、一種類の検索キーで検索する。検索キーの種類は「キーワード」になっているが「個人名」など、他の種類も選択できる。画面の左上に「詳細検索」へのリンクがある。詳細検索画面では最大四個・四種類の検索キーを組み合わせた絞り込み検索ができる。それぞれの検索キーに対し、キーワードとフレーズの切り替えができ、加えてブール演算の論理和や論理積の指定も可能で、一覧表示を見ながらの微調整、検索キーの加減も可能である。また、印刷楽譜、録音資料といった資料タイプによる絞り込みもできる。

検索項目のうち、個人名、団体名、個人・団体を一緒に検索する著作者名、タイトル（作品名）、シリーズ、件名・ジャンルは典拠データベースも同時に検索し、一覧表示に反映される。この典拠コントロール技術により、文字種の違い、表記のゆれ、書誌データには含まれないが、その著作の検索には不可欠な項目での検索が可能になっている。

一覧表示は、左端に資料タイプを示すアイコン画像、その右に目録データのラベル（主要）情報（基本のアクセス・ポイント、タイトルと責任表示、出版・頒布情報）が表示される。その上段には請求記号もあるので、この一覧画面から資料請求も可能である。

一覧表示の左側にあるアイコン画像または紺色でリンク先を示す「詳細画面」をマウスでクリック、または指でタップすると詳細表示画面が現れる。

詳細表示の先頭には一覧表示と同じ書誌データのラベルを表示して、一覧表示との連続性を示している。書誌データ本体はタグ形式という三桁の英数字で意味づけされたタグ番号に続けて入力されているが（その形式で表示することもできる）、メインの詳細表示は左側にデータの概要を示すラベルを表示する形式になっている。目録情報本体は、上から順に、資料の個別データ（請求記号、資料番号）、資料種別とタイプ、資料から転記した書誌データ（タイトルと責任表示、発行・頒布、形態）、注記、各種のアクセス・ポイント（著作責任、主題とジャンル・形式）、コード・デー

タを可視化した言語や発行国などのその他の情報、標準番号など資料を特定するための各種の番号、となっている。アクセス・ポイントのうち、典拠レコードにリンクする場合は、項目末尾に小文字「a」で始まる典拠レコード番号があり、それをクリックまたはタップすると、その内容を表示して個人や作品のプロファイルを閲覧することができる。

（とりうみ・けいじ　資料検索システムデザイン株式会社
トッカータチーフ・ライブラリアン）

仕事の周辺

どこまでが「音楽」？

「発車メロディ」の現在が問いかけるもの

渡辺　裕

「音楽学」の研究者だったはずなのだが、このところ、バナナの叩き売りの口上やら、チンドンやら、「音楽」の概念の境界線上にあるようなものばかり研究している。今もまた、駅の発車メロディのことを調べているのだが、調べれば調べるほど微妙な感じがつきまとってくる。あれを「音楽作品」とみなすべきなのか、どうなのか…。

発車メロディがＪＲ東日本の新宿駅と渋谷駅に最初に設置されたのは一九八九年と、実は意外に新しい。それ以前は、けたたましい金属製のベルが長いこと使われており、その後、電子音に置き換わったのだが、これまた不評で、それに代わり「環境にやさしい」という触れ込みで登場したのが、この発車メロディだった。新聞を調べてみると、当時、駅の音環境の悪さについて議論が盛り上がっていた様子がよくわかる。朝日新聞では本多勝一が一九八七年一一月一三日付けの「騒音に鈍感すぎないか」と題されたコラムで日本の駅のアナウンスのうるささを話題にしたところ、大きな反響があり、それを受けて「何とかならない？拡声機公害」という特集が組まれている。八八年八月にはＪＲ東日本の千葉駅で発車ベルが全面的に廃止され、議論を呼んだ。新宿、渋谷の両駅を皮切りに、発車メロディの導入があっという間に進んだのはそういう背景ゆえのことだった。

それゆえ、この新宿駅のものは音の環境に細心の注意をはらって作られていた。今あらためて聞くと、ハープやピアノの音を基調に、小鳥のさえずり、川のせせらぎ、それに鹿の鳴き声までさりげなく配した、何とも凝った作りである。番線ごとに周到にデザインされ、複数が一緒に鳴っても調和するような配慮までなされていた（この初期のものはすでに取り替えられており、今は聞くことができない）。

その凝ったつくりの一方で、これら初期の発車メロディからは「、音楽」や「音楽作品」として聴かれることを拒否し、表現主体としての「作者」を可能な限り消し去ろうとする強い方向性が感じられる。営団（現東京メトロ）南北線のように、吉村弘（一九四〇〜二〇〇三）という著名な「作曲家」がデザインしたケースもあったが、そこでも「音楽」やその背後にある「作者」の影はほとんど感じられない（この南北線のものも今年になって新しいものに置き換えられてしまった）。吉村のように「環境音楽」や「サウンドスケープ」の流れに関わった作曲家の大半は、現代作家として「反芸術」的なコンテクストで活動してきた経緯があり、既成の「音楽」や「音楽作品」へのアレルギーが大きかったのである。

それから二〇年以上がたち、発車メロディの様相は大きく変わった。最近顕著なのは、その土地ならではの「ご当地メロディ」への動きである。私がよく使うＪＲ東日本の八王子駅でも、二〇〇五年から新たに童謡《夕焼け小焼け》のメロディが使われている。八王子出身の作詞者・中村雨紅に因んだものだが、こういうときに想定されるのはまずもって、その地に因んだ既成の「音楽」であり、そこからあえて距離を置くことで環境の中に溶け込もうとしていた初期の発車メロディからは想像できなかったような「音楽志向」的なあり方になっている。

一方、二〇〇七年には、ミュージシャン向谷実がトータルデザインした京阪電車の発車メロディが話題になった。各駅のものをつなぐと一曲の楽曲になるというもので、ＣＤも発売されており、そこにはフルバンド編成の「アレンジバージョン」などもおさめられている。向谷は、著書やネット動画などで、その制作意図を詳細に語っており、「作者」は自らを消し去るどころか、この「作品」の表現主体としてむしろ前面に出ている。「作品性」や「作者性」全開の状況を象徴しているのが著作権問題である。発車メロディの愛好家には、ウェブサイトなどで蘊蓄を傾けている人も少なくない。実際、これらのサイトでは、どこの駅の何番線の発車メロディは何年何月何日に変更されたもので制作者は誰それである等々、驚くほど精緻な情報が提供されている。自らが駅で録音してきた音を公開している人も多く、変更されてもはや流れていないものも大抵は聞ける。発車メロディが「文化」として今日のような広がりをもつようになったというのも、愛好家たちが無償で運営してきたこれらのウェブサイトの拠点としての機能に負うところが多いように思う。

ところが何年か前から、日本音楽著作権協会（ＪＡＳＲＡＣ）が多くのサイトに音源の公開中止を求める事態が生じた。その中には一〇年以上にわたって音源の公開を続けてきた「老舗」サイトも含まれており、閉鎖を余儀なくされるものも出てきた。創作性のある「著作物」であるから、たとえ自分で録音したものであれ、無許可で掲載するのは著作権法違反にあたるというわけであり、現在では、日本音楽著作権協会に管理委託されているものは公開を自粛するのが通例となった。この「文化」をここまで押し上げるのに貢献してきたサイトへの「恩を仇でかえす」振る舞いにもみえなくないが、それはさておき、「作者」が日本音楽著作権協会に管理委託したということは、その「作品性」の宣言と言ってもよく、それが著作権問題に波及するのも当然ではある。二〇年以上の歳月を経て、発車メロディを取り巻く文化環境がかくも変わってしまったことにあらためて驚かされるのである。

良し悪しの問題ではない。それが「文化」である以上、こうした変化は当然起こりうるものだし、むしろ「音楽」の定義や「作品」の概念までもが、時代状況の中で問い直されるところにこそ「文化」のおもしろさがあるとも言えるから、発車メロディの「作品化」という現象自体、考察する価値のある現象に相違ない。しかし、ここではたと考えるのである。たとえば、「音楽」に限定して基本的な資料を収集する使命をもっている日本近代音楽館の活動にとって、発車メロディは守備範囲にはいるものなのだろうか。「作者性」があり「作品化」されたものだけが対象なのだとすれば、最近の発車メロディだけが「音楽」なのか。では、「作曲家」の吉村弘が「作者性」や「作品性」を消そうとして作ったものはどうなのか。考えれば考えるほどわからなくなるのである。

（わたなべ・ひろし館収書委員
東京大学教授）

資料受入報告

「湯浅譲二資料」に自筆譜等追加

二月一二日、作曲家湯浅譲二氏の自筆譜等を追加受入、「湯浅譲二資料」に収められた。今回受け入れた資料は一九五〇年代から二〇〇〇年代に書かれた作品の一部で、「箏とオーケストラのためのプロジェクション〈花鳥風月〉」（一九六七）、「芭蕉の風景」（一九八〇）、「クロノプラスティックⅢ」「内触覚的宇宙第五番」（いずれも二〇〇一）などが含まれる。講演原稿、雑誌執筆稿なども併せて収められた。

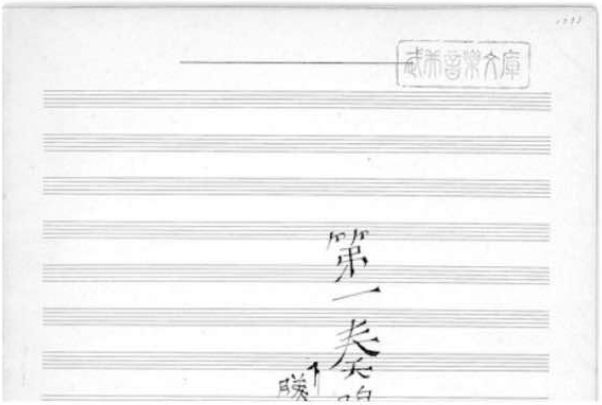
遠山一行蔵書を受贈

四月九日、故遠山一行氏蔵書およそ一〇〇〇点を受贈した。資料は、音楽理論、音楽史のほか、モーツァルト、ショパン、ストラヴィンスキー、ヴァーグナーなどの作曲家研究を主題とする洋書、洋楽譜が中心。ミヨー、シェーンベルクほかの橋本國彦旧蔵楽譜も含まれている。

「若杉弘資料」に公演資料を追加

六月二四日まで、数次にわたって資料を追加受贈、「若杉弘資料」に収められた。内容は、演奏会プログラム、ポスター（海外公演を含む）、公演企画関係資料、批評（新聞・雑誌切抜）、視聴覚資料などである。

菅原明朗自筆譜等を受贈



九月四日、作曲家故菅原明朗氏（一八九七～一九八八）の自筆譜等を受贈した。資料は「第一奏鳴楽〈勝絶調〉」（一九二三写真は標題紙）、「Autobus（内燃機関）」（一九二九）ほか武井守成旧蔵楽譜を中心に二六点（コピーを含む）。

なお、菅原明朗資料は、現在、その多くが明石市立文化博物館に保存されている。

〈コラム　著作権あれこれ②〉

著作権侵害の非親告罪化について

飯田浩司

一〇月五日にアトランタで開催された閣僚会合でＴＰＰ（環太平洋戦略的経済連携協定）が大筋合意に達し、著作権については、前号で触れた著作権保護期間の延長の他にも著作権侵害の非親告罪化、著作権侵害の法定損害賠償制度の採用などが合意されました。今回は、このうち、著作権侵害の非親告罪化について、少し解説したいと思います。

犯罪には、被害者から捜査機関に対して告訴がなくても、捜査機関が自主的に捜査を行い、被疑者を起訴できるものと、被害者が捜査機関に対して告訴をしない限り、捜査機関が捜査を行い、被疑者を起訴できないものがあります。前者は非親告罪、後者は親告罪と呼ばれています。日本の場合、著作権侵害の大部分は、親告罪として規定されています。

こういった非親告罪化の背景には、コンテンツの輸出で他の参加国を圧倒している米国の要請があることは言うまでもありません。非親告罪化を行うことによって、海外での海賊版の徹底した取締りが期待できるというわけです。確かに、非親告罪化には、このような利点があることは確かです。

一方、非親告罪化されると、厳密に言えば著作権侵害に当たるものの、権利者が特に問題視していない著作権侵害についても、不必要に捜査機関が自らの判断で捜査を行い、被疑者を起訴するおそれがあります。そうなってくると、二次創作やパロディなどの創作活動が萎縮してしまうおそれもあります。

政府の発表資料によると、非親告罪化されるのは、「故意による商業的規模の著作権…を侵害する複製」等であり、また、「その適用を著作物等を市場において利用する権利者の能力に影響を与える場合に限定することができる」とされています。前記の非親告罪化に伴う懸念にも一定の配慮がなされているようではありますが、これらの条項の射程は必ずしも明らかではなく、今後の動向を注視する必要がありそうです。

（いいだ・ひろし館副音楽館長・本学経済学部教授）

◇日誌から◇

二〇一四年八月～二〇一五年一〇月

■二〇一四年

八・二　大学夏期休暇に伴う土曜休館（9・13まで。8・7～15　夏期休館）。

八・三〇　ＮＨＫテレビ「伊福部昭の世界」資料協力。

一〇・一　『館報』三号発行。

一〇・五　宮城テレビ放送「支倉常長生き続けた400年」に資料協力。

一〇・二二　二〇一四年度第三回運営委員会開催。

一〇・二五　ＮＨＫテレビ「ららクラシック王妃アントワネットが愛したオペラ」に資料協力。

一一・八　第三回レクチャーコンサート「洋楽渡来考」開催。

一一・八　ＷＯＷＯＷ「ノンフィクションＷ天才作曲家・早坂文雄幻のテープが語る『七人の侍』」に資料協力。

一一・一　因幡万葉歴史館「生誕100年　音楽家伊福部昭」に資料提供（12・23まで）。

一二・二五　冬期休館（1・3まで）。

■二〇一五年

一・二八　二〇一四年度第四回運営委員会開催。

二・二一　世田谷美術館「東宝スタジオ展」に資料提供（4・19まで）。

三・五　二〇一四年度第二回収書委員会開催。資料受入について討議。

三・七　東京大学駒場博物館「會舘の時代」に資料提供（4・5まで）。

三・一一　福岡放送「ニュース5チャン」に資料提供。

三・一五　ＢＳ朝日「百年名家」に資料提供。

三・二六　ＮＨＫ・ＢＳプレミアム「クラシック倶楽部オーケストラの夜明け～没後50年山田耕筰若き日の管弦楽曲～」に資料提供。

三・二七　木山捷平文学研究会「生誕111年木山捷平展」に資料協力（4・1まで）。

四・一一　ＮＨＫ「あの人に会いたい奥田良三」に資料協力。

四・二二　二〇一五年度第一回運営委員会開催。

六・二四　二〇一五年度第二回運営委員会開催。

七・一七　蓄音機試聴会「ＳＰレコードを聴く午後」開催。

七・二二、二九　ＢＳ朝日「黒柳徹子のコドモノクニ山田耕筰篇」に資料協力。

七・三一　ＴＢＳ・Ｎｅｗｓｉ［「ヒロシマ」初演録音を発見］に協力。

八・一　大学夏期休暇に伴う土曜休館（9・12まで。8・12～21　夏期休館）。

一〇・二　ＮＨＫ・Ｅテレ特集番組「時代を楽譜に刻んだ男山田耕筰」に資料協力。
一〇・一七第四回レクチャーコンサート「遠山一行先生とモーツァルト」開催。
一〇・二八　二〇一五年度第三回運営委員会開催。

編集後記

館報四号をお届けします。今号は、渡辺裕氏、鳥海恵司氏にご寄稿いただき、また、飯田浩司副館長によるコラムは連載二回目となりました。◁樋口隆一氏には遠山一行先生への追悼文をお寄せいただきました。先生のお名前を冠した名称の下、音楽館スタッフ一同、気持ちも新たに業務に取り組んでまいります。変わらぬご支援ご協力をお願い申し上げます。◁制作にあたり、ひとま舎上村様には一方ならぬお世話になりました。ありがとうございました。（七階人）

第４号　二〇一五年一二月二二日発行
編集発行人　秋月　望
発行所　明治学院大学
遠山一行記念日本近代音楽館
東京都港区白金台一―二―三七